

筑波大学中央図書館蔵『式子内親王御歌』釈文・校勘記

武井和人

【凡例】

一、筑波大学中央図書館蔵『式子内親王御歌』（九一一・一三八―Sh三四）を

底本にして釈文を作成した。底本の書誌、諸伝本における位置づけ、本文の

特徴等については、後掲する【校勘記】を参照されたい。

一、釈文作成にあたり、以下の方針に従った。

(1)漢字は原本に近い字形を可能な限り採った。

(2)和歌末尾に、新編国歌大観番号を（ ）で囲んで示した。

(3)面移りを「1才の如く示した。

(4)他本と照らして和歌に闕脱があると思はれる部分は、【】で囲って注記を

施した。

【釈文】

(前表紙)「1才

(見返し)「1ウ

(白紙)「2才

(白紙)「2ウ

(白紙)「3才

春

式子内親王御哥

春もまつしるくミゆるハ音羽山ミねの雪より出る日の色(一)

うくひすハマたこゑせねと岩そくたるみの音に春を聞ゆる(二)

色うつむ梅の木のままの夕月夜春のひかりをミせ初る哉(三)

春くれハ心もとけてあハ雪のあハれふりゆく身をしらぬ哉(四)

見わたせハこのもかのもにかけてけりまたぬきうすき春の衣を(五)

跡絶ていくえもかすめふかく我世を宇治山の春のふもとに(六)

春そかしおもふハかりにうちかすミめくむ梢そなかめられける(七)「3ウ

消やらぬ雪にはつるゝ梅かえの初花そめのおくそゆかしき(八)

たかさとの梅のにほひにふれつらんうつりかしるき人の袖哉(九)

梅のはな恋しき事の色そゝふうたてにほひのきえぬ衣に(一〇)

花ハいさそこはかとなくみわたせハ霞そかほる春のあけほの(一一)

はかなくて過こし方をかそふれハ花に物おもふ春そへにける(一二)

花ならて又なくさむる方も哉つれなくちるをつれなくてミむ(一三)

たれもみよ芳野の山のミねつゝき雲そ桜よ花そしら雪(一四)

花咲し尾上ハしらす春霞千種の色のきゆる比哉(一五)「4才

春風やまの軒はを過つらむふりつむ雪の消る手枕(一六)

残ゆく在明の月のもるかけにほの／＼おつる木かくれの花(一七)

鶯も物うく春はくれ竹の夜かれにけりな宿もさひしく(一八)

古郷へ今ハとむかふ鷹かねもわかるゝ雲の明ほのゝ色(二一九)
けふのミと霞の色も立わかれ春ハ入日の山のはのかけ(二二〇)

夏

春の色のかへうき衣ぬき捨し昔にあらぬ袖を露けき(二二一)
子規いまた旅なる雲路より宿かれとてそうへし卯花(二二二) 4ウ
忘れめやあふひを草に引むすひかりねの野への露の明ほの(二二三)
哀とや空にかたらふ郭公ねぬ夜つもれるよハの一こゑ(二二四)
雨すくる花たちはなに郭公をとつれすとてぬれぬ袖かハ(二二五)
けふハ又ふきそへてけりあしの屋のこやの軒はもあやめひまなく(二二六)
たゝきけるくみな音も深にけり月のミとつる苔の戸ほそに(二二七)
なかむれ八月ハたえ行庭のおもにハつかに残る螢ハかりそ(二二八)
さらすとてしはし忍ぬ昔かハ宿しもわきてかほるたち花(二二九)
夏の夜ハやかてかたふく三か月のミるほともなく明るしのゝめ(三〇〇) 5才
な残なく雲のあなたに晴にけりと山へかゝる夕たちの空(三〇一)
みしか夜の窓のくれ竹うちなひきほのかにかよふうたたねの夢(三〇二)
松陰の岩間をくゝる水のをとに涼しくかよふ日くらしのこゑ(三〇三)
てらす日ハさやかに夏の空ながら時を過たる松のした風(三〇四)
里とをさいたみのミ草うちハラふ程こそ秋ハとなりなりけれ(三〇五)

秋

夏くれてけふこそ秋ハたつた山風の音より色かハるらん(三〇六)
秋きぬと萩のは風のつけしよりおもひし事のたゝならぬ哉(三〇七) 5ウ
なかむれハ衣手涼し久かたのあまのかハらの夕くれの空(三〇八)
おほかたの秋のあハれを袖の露かくなれさらむ人にとハゝや(三〇九)

吹むすふ露もなミたもひとつにておさへかたきハ秋の夕暮(四〇〇)
袖のうへハ露のやとりに成にけり所もわかす秋たちしより(四〇一)
秋ハたゝ夕の空のけしきこそその事となくなかめられけれ(四〇二)
おもほえすうつろひにけりなかつゝ枕にかゝる秋の夕露(四〇三)

唐衣すそのゝ原に立霧のたえまゝハにしきなりけり(四〇四)

旅ころも露をかたしくはれ野のおなし床にもなく鶉哉(四〇五) 6才
夕霧も心のそこにむせひつゝわか身ひとつの秋そふけ行(四〇六)

月のすむ草の庵を露もれハ軒にあらそふ松虫の聲(四〇七)

をしこめて秋のあハれにしつむ哉ふもとの里の夕霧のそこ(四〇八)
いつ方へ雲井のかりの過ぬらん月は西にそかたふきにけり(四〇九)

よひのまにさてもねぬへき月ならハ山のはちかき物ハおもハし(四一〇)
あきの空雲なき月をくもらせてふけ行まゝにぬるゝかほ成(四一一)

楨の戸ハさゝてならひぬあまの原よわたる月のかげにまかせて(四一二)
それなからむかしにもあらぬ秋風にいとゝなかめをしつのをたまき(四一三) 6ウ
さほ山の柞の紅葉色に出で秋なかしとや霧にもるらん(四一四)

とゝまらぬ秋をや送なかわれハ庭の木葉のひとかたへゆく(四一五)

冬

神な月風ハ軒をハラひつゝ闇までしくハ木葉なりけり(四一六)
いかにせむ千種の色ハむかしにて又さらになき花の一もと(四一七)
楨の屋に時雨ハすきて行物をふりもやまぬや木葉成らん(四一八)
さししきハ宿のならひを木葉しく霜のうへともなかつめる哉(四一九)
冬くれハ谷の小河の音たえて峯の嵐そ窓をとひける(四二〇) 7才
にほ鳥のたちぬにハラふ翅にもをちぬ霜を八月としらすや(四二一)

冬の夜のみきハにさハくあしかもにむすひそあへぬ霜も氷も(六二)
ま柴つむ宇治の川舟よせわひぬさほのしつくもかつ氷つゝ(六三)
色ゝの花も紅葉もさもあらハあれ冬の夜ふかき松風の音(六四)

またれつるひましらむらんほの／＼とさほのかハらに千とりなく也(六五)

さらぬたに雪のひかりハある物をうたゝ有明の月そうつらぬ(六六)

ふく風にたくふ千鳥ハすきぬ也あれそ軒に残るをとつれ(六七)

おもふより猶ふかくこそさひしけれ雪ふるまゝのをのゝ山さと(六八) 7ウ

住なれて誰ふりぬらんうつもるゝ柴のかきねの雪のいほりに(六九)

年なミのかさなることをおとろけハ夜な／＼袖にそふ氷哉(七〇)

戀

たつぬへき道こそなけれ人しれす心ハなれて行帰れ共(七一)

ほのかにもあハれハかけよおもひ草下葉にまかふ霧もゝらさし(七二)

夏山に草かくれつゝ行鹿のありとハみえてあハしとやする(七三)

しるらめやかつらき山のしら雲のたちゐにかくるわか心とは(七四)

たのむ哉またみぬ人をおもひねのほのかになるゝよひ／＼の夢(七五) 8オ

あハれともいはさらめやハおもひつゝ我のミしりし世をこふる哉(七六)

みえつるかミぬ夜の月のほめきてつれなかるへき面かけそそふ(七七)

つかのまのやミのうつゝもまたしらす夢よりゆめにまよひぬる哉(七八)

したにのミせめておもへとかたしきの袖こそ瀧津をとまさる也(七九)

むねのせき袖のみなどゝ成にけりおもふ心ハひとつなれ共(八〇)

よるなミのたかしのはまの松風のねにあらハれて君かなもをし(八一)

いにしへに立かへりつゝみゆる哉なをこりすまのうらのなミ風(八二)

恋／＼てよしみよ世にもあるへしといひしにあらす君も聞らん(八三) 8ウ

つらし共あハれともまつ忘れぬ月日いくたひめぐりきぬらん(八四)

恋／＼てそなたになひく煙あらハいひし契のハてになかめよ(八五)

雜

こけむしる岩ねの枕なれ／＼て心をあらふ山水のこゑ(八六)

つもりある木葉のまかふ方もなく鳥たにふまぬ宿の庭哉(八七)

しつかなる草の庵の雨の夜をとふ人あらハあハれとやミン(八八)

すミなれんわか世とこそハおもひしに伏ミのくれの松風の庵(八九)

さかつきに春のなミたをそゝきける昔にゝたる旅のまとゐに(九〇) 9オ

つたへきく袖さへぬれぬ浪の上に夜ふかくすみし四の緒のこゑ(九一)

山ふかくやかてとちにし松の戸をたゝあり明の月やもりけん(九二)

日に千たひ心はたにゝなけハてゝ有にもあらす過る我身を(九三)

うらむともなけくとも世の覚えぬになみたなれたる袖の上哉(九四)

別にし昔をかくるたび毎にかへらぬなミそ袖にくたくる(九五)

けふまでもさすかにいかて過ぬらんあらましかハと人を恋つゝ(九六)

みしこともミぬ行す多もかりそめの枕にうかふまほろしのうち(九七)

うき雲を風にまかする太空の行多もしらぬハてそかなしき(九八) 9ウ

【九九〜一六九…：闕】

けさの雪にたれかハとハむ駒のあとをたつぬる人のこゑハかりして(一七〇)

せめて猶心ほそきハ年月のいるかことくにあり明の空(一七一)

戀

おきふかミつりするあまのいさり火のほかにミてそ思初てし(一七二)

思ふよりみしよりむねにたくこひのけふうちつけにもゆるとやしる(一七三)

あハれとハさすかにみるやうち出しおもふなミたのせめてもらすを(一七四)

おもひかねあさ澤をのゝせり摘し袖のくちゆく程をミせはや(二七五)
かりにたにまたむすはねと人毎の夏野の草にしけき比哉(二七六) 10才
我恋ハあふにもかへすよしなくて命ハかりのたえやハてなむ(二七七)

【一七八……闕】

あさましやあさかのぬまの花かつミかつミなれても袖ハぬれけり(二七九)
わか袖のぬるゝハかりハつゝみにすゑつむ花ハいかさまにせむ(二八〇)
いりしより身をこそくたけあさからす忍ふの山の岩のかけみち(二八一)
年月の恋もうらみもつもりてハ明るにまさる袖のふち哉(二八二)
ときハ木の契やたかふたつたひめしらぬ袂も色かハリゆく(二八三)
なをさらハみたらし川にみそきせむマヤ(二八四)
たゝいまのゆふへの空を君もミておなし時雨や袖にかくらん(二八五) 10ウ
たそかれの萩のは風にこの比のとハぬならひをうち忘つゝ(二八六)

雑

旅人のあとたにミえぬ雲のうちもなるれハなるゝ世にこそ有けれ(二八七)
いそかすハ二夜もみまし草の庵のむかひの山に出る月かけ(二八八)
露霜もよものあらしにむすひきて心くたくるさ夜の中山(二八九)
行とまる方ハそこ共しら雲や紅葉のかけの旅人のやと(二九〇)
なかむれハ風のごゑも浪の音もふけぬのうらの有明の月(二九二)
河舟のうきて過行浪のうへハ東のことそしられなれぬる(二九二) 11才

【一面空白 一九三〜二〇〇……闕】 11ウ

鶴の子の千たひすたゝん君か世を松の陰にやたれもかくれむ(二〇一)
けんきう五年五月二日

春

峯の雪もまたふる年の空なからかたへかすめる春の通路(二〇二)

山ふかミ春ともしらぬ松の戸にたえ／＼かゝる雪のたま水(二〇三)

雪消てうらめつらしき初草のはつかに野へも春めきにけり(二〇四)

にほの海や霞のうちにこく舟のまほにも春のけしきなる哉(二〇五)

あし引の山のはかすむあけほのに谷より出るとりの一こゑ(二〇六) 12才

なかもやる霞の末ハしら雲のたなひく山の明ほのゝ空(二〇七)

袖のうへにかさねマヤの梅はおとつれて枕にきゆるうたゝねの夢(二〇八)

詠つるけふは昔になりぬ共軒はの梅よ我をわするな(二〇九)

いま桜咲ぬとミえてうすくもり春にかすめる世のけしき哉(二一〇)

待ほと心のうちに咲花をつみに芳野へうつしつる哉(二一一)

嶺の雲ふもとの雪に埋れていつれを花とみよし野の里(二一二)

高砂の尾上のさくらたつぬれは都のにしきいくゑかさねぬ(二一三)

とふ人もおらてをかへれ鶯のはかせもつらき宿のさくらを(二一四) 12ウ

霞あるたかまの山のしら雲ハ花かあらぬかかへる旅人(二一五)

夢のうちもうつろふ花に風吹てしつ心なき春のうたゝね(二一六)

けさミれハ宿の梢に風過てしられぬ雪のいくゑともなく(二一七)

いまハたゝ風をもいハし吉野川岩こす花にしからミも哉(二一八)

花ハちりて其色となく詠れはむなしき空に春雨そふる(二一九)

水くきのあともとまらずミゆる哉浪と雲とにきゆるかりかね(二二〇)

なときむる春をうらむる鶯の泪なるらし枝にかゝれる(二二二)

夏 13才

桜色の衣にも又わかるゝに春をのこせる宿の藤なみ(二二二)

待さとをわきてやもらず子規卵花かけの忍ねのころ(二二三)

時鳥なきつる雲をかたみにてやかてなかむるあり明の空（二二四）

こゑハして雲路にむせふ郭公なみたやそゝくよひの村雨（二二五）

郭公よこ雲かすむ山のはのあり明の月に猶そかたらふ（二二六）

水くらき岩まにうかふ夏むしのともしけちても夜をあかず哉（二二七）

五月雨の雲ハひとつにとちハてゝぬきミたれたる軒の玉水（二二八）

いにしへを花たちはなにかすれハ軒の忍ふに風かよふなり（二二九）
13ウ

かへりこぬ昔をいまとおもひねの夢の枕ににほふたち花（二三〇）

真くす原うら風なるゝ夏の夜ハ秋たちそむるせミの羽衣（二三一）

涼しやと風のたよりをたつぬれハしけミになるゝ野へのさゆりは（二三二）

さ夜ふかミ岩もる水の音絶て涼しくなりぬうたゝねの床（二三三）

池寒きはすのうき葉も露ハぬ野へに色なる玉やちるらん（二三四）

月の色も秋ふかしとやさ夜更てまかきの荻のおとろかすらん（二三五）

秋風と鳥にやつくる夕暮の雲ちかきまで行蛸かな（二三六）

秋 14才
うたゝねのあさけの袖にかはる也ならずあふきの秋の初かせ（二三七）

なかむれば木葉うつろふ夕月夜やゝけしき立秋の空哉（二三八）

日晩のこゑもつきぬる山かけに又おとろかす入あひのかね（二二九）

跡もなき庭のあさちにむすほゝれ露のそこなる松虫のこゑ（二四〇）

我宿のいな葉の風におとろけハ霧のあなたに初かりのこゑ（二四一）

よせかくる浪の花すりミたれつゝしとろにうつすまのゝうら萩（二四二）

白露の色とる木ゝおそけれと萩の下葉そ秋をしりける（二四三）

花すゝきまた露ふかしほに出てなかめしとおもふ秋のさかりも（二四四）
14ウ

秋といへば物をおもふ山のはにいさよふ雲のゆふされの空（二四五）

唐衣みたれにけらしあつさ弓ひくまの野への萩の下露（二四六）

萩の上にかりの泪のをく露は氷にけりな月にむすひて（二四七）

なかめわひぬ秋より外のやとも哉野にも山にも月やすむらん（二四八）

ふけにけり山のはちかく月さへてとをちの里に衣うつこゑ（二四九）

古郷ハむくらの軒もうらかれて夜なゝはるゝ月のかけ哉（二五〇）

とけてぬぬ我さへ色に出ねとや露ふきむすふ峯のこからし（二五一）

しるき哉あさち色つく庭の面に人めかるへき冬のちかさハ（二五二）
15才

秋の色ハまかきに遠くなり行と手枕なるゝねやの月かけ（二五三）

あさち原初霜むすふなか月の有明の空におもひきえつゝ（二五四）

桐のはもふミ分かたく成にけりかならず人をまつとなけれと（二五五）

おもへとも今夜ハかりの秋の空更行空にうち時雨つゝ（二五六）

冬
神な月みむろの山の山おろしにくれなあくゝる龍田川哉（二五七）

梢にハ残にしきもとまりけり庭にそ秋の色ハ立ける（二五八）

みるまゝに冬ハきにけり鴨のある入江のみきハうす氷しつ（二五九）
15ウ

しくれつゝ四方のもミち葉ちりハてゝ霰そおつる庭の木かくれ（二六〇）

あれくらす冬の空哉かきくもりみそれよこきる風きほひつゝ（二六一）

あしかものハラひもあへぬ霜のうへにくたけてかゝるうす氷哉（二六二）

霰ふる野路のしの原ふしわひて更にミヤこを夢にたにミす（二六三）

かたしきの夜ハの衣手さえゝて初雪しろしおかのへの松（二六四）

むれてたつ空も雪けにきえくれて氷のねやにをしそ鳴なる（二六五）

身にしむハ庭火の影にさえのほる霜夜のほしの明かたの空（二六六）

あまつ風水をわたる冬の夜のをとめの袖ハみかく月影（二六七）
16才

日數ふる雪けにまさる炭かまの煙もさひし大原の里(二六八)

わたの原ふかくや冬の成ぬらん(つゞ)(二六九)

人とはぬ都のほかの雪の中も春のとなりと近づきにけり(二七〇)

をのつからなからへハ猶いくたひか老をむかへてあはれと思はん(二七一)

戀

しるへせよ跡なき浪にこく舟の行ゑもしらぬ八重の塩かせ(二七二)

かくとたにいハかきぬまの身をつくししる人なしにくつる袖哉(二七三)

夢にてもミゆらん物をなけきつゝうちぬるよひの袖のけしきハ(二七四) 16ウ

わか恋ハしる人もなしせく床のなミたもらすなつけのをまくら(二七五)

しらせはやすかたの池の花かつミかつみるまゝに浪そしほるゝ(二七六)

わきも子か玉ものすそによるなミのよるとハなしにほさぬ袖哉(二七七)

あふ事ハ遠つのはまの岩つゝしいはてやくちんそむる心を(二七八)

わか袖ハかりにもひめや紅のあさハの野らにかゝる夕露(二七九)

あふ事ハけふまつかえの手向草いく代しほるゝ袖とかハしる(二八〇)

まち出てもいかななめむわするなといひしはかりの有明の空(二八一)

旅 17才

都にて雪まハつかにもえ出し草引むすふさ夜の中山(二八二)

あら磯の玉もの床にかりねして我から袖をぬらしつる哉(二八三)

宮こ人おきつこしまの濱ひさし久しくなりぬ浪路へたてゝ(二八四)

行す多ハいまいくかとか岩代のおかのかやねに枕むすはむ(二八五)

松かねのをしまか磯のさよ枕いたくなぬれそあまの袖かハ(二八六)

山家

我宿ハつま木こり行山かつのしハ／＼かよふあとハかりして(二八七)

いまハ我松のはしらの枕の庵とつへき物をこけふかき袖(二八八) 17ウ

山のはハ峯の木葉にきほひつゝ雲よりおるすきをしかのこゑ(二八九)

【二九〇……闕】

やま里ハみねにたえせぬ松のこゑ木葉にしのお谷の下水(二九一)

鳥

曉のゆふつけ鳥そあはれなるなかきぬふりを思ふ涙に(二九二)

なく鶴のおもふ心ハしらね共夜るのこゑこそ身にハシミける(二九三)

身のうさをおもひくたけハしのゝめの霧まにむせふ鳴のはねかき(二九四)

はかなしや風にたゝよふ浪の上にはほのうきすの扱も世にふる(二九五)

うちはらひをのゝあさちにかる草のしけミか下にうつら鳴也(二九六) 18才

祝

君かへむ千代松風に吹そへて竹の下ふるこゑかよふなり(二九七)

天か下めくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末／＼(二九八)

いく年のいく萬代か君か世に雪月花の友をまちけん(二九九)

龜のをの岩ねかうへにあるたつも心してける水の色哉(三〇〇)

君かよハひ三熊野河のさゝれ石の苔むす岩となりつくすまで(三〇一)

【二行分空白】 18ウ

【一面空白】 19才

【一面空白】 19ウ

【後表紙見返し】 20才

【後表紙】 20ウ

【校勘記】

〇緒言

ここに釈文を示した筑波大学中央図書館蔵本は、『国書総目録』『古典籍総合目録』『日本古典籍総合目録』等に掲出されておらず、その限りにおいては学界未紹介の新資料であると思はれる（帙貼付ラベル、受入印等から、一九八〇年代後半、一誠堂書店より購入したものかと推されるが、詳細は不明）。小論の筆者は、筑波大学図書館の蔵書検索システムにて所蔵を知り得た。なほ、筑波大学中央図書館には今一本、旧東京教育大学文学部国語国文学研究室蔵『式子内親王集』（ル二二六―九）も蔵される（『国書総目録』他掲載。詳細は拙著『中世和歌の文献学的研究』（笠間書院、一九八九・七）参照）ので、（小論で論及することはないものの仮想的に）この本を「教育大本」と呼び、それと区別するために、該本を以下「筑波大本」と呼ぶこととする。

1書誌

〔函架番号〔九一―一・一三八―Sh三四〕。帙入。列帖装（原装）
1帖。縦26・1×横17・1cm。外題は存しない。一面八行。一
首一行書。料紙は鳥の子。紙数は以下の通り。〕

第一括……紙数5枚

1丁表……前表紙

裏……見返し ※右下に「筑波大学図書館」
の受入印。

2丁表……白紙 ※右下隅に蔵書印（高泉艸堂蔵

書、長方朱印、単郭、陽刻）一類捺され

る。

裏……白紙

3丁表……白紙

裏……【一〇七】

4丁表……【八〇一五】

裏……【一六〇二二】

5丁表……【二三〇三〇】

裏……【三一〇三七】

6丁表……【三八〇四五】

裏……【四六〇五三】

7丁表……【五四〇六〇】

裏……【六一〇六八】

8丁表……【六九〇七五】

裏……【七六〇八三】

9丁表……【八四〇九〇】

裏……【九一〇九八】

《九九〇一六九〇〇》

10丁表……【一七〇〇一七六】

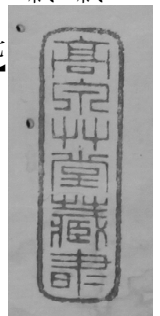
裏……【一七七〇一八五】

《一七八〇〇〇》

第二括……紙数5枚

11丁表……【一八六〇一九二】

裏……【空白、一九三〇二〇〇〇〇〇】



- 12 丁表……【二〇一〜二〇六】
裏……【二〇七〜二一四】
 - 13 丁表……【二一五〜二二一】
裏……【二二二〜二二九】
 - 14 丁表……【二三〇〜二三六】
裏……【二三七〜二四四】
 - 15 丁表……【二四五〜二五二】
裏……【二五三〜二五九】
 - 16 丁表……【二六〇〜二六七】
裏……【二六八〜二七四】
 - 17 丁表……【二七五〜二八一】
裏……【二八二〜二八八】
 - 18 丁表……【二八九〜二九六】
《二九〇》闕》
 - 裏……【二九七〜三〇一】
 - 19 丁表……白紙
裏……白紙
 - 20 丁表……後表紙見返し
裏……後表紙
- 書写時期は江戸初期と見て良いと思ふ。『式子内親王集』諸伝本において、江戸初期にまで遡るものはどちらかといふと少なく、その意味では古写本の一といへよう。蔵書印「高泉艸堂蔵書」は、忽卒の調べではあるが、同一のものが、

① 早稲田大学図書館蔵『魯西亜本記畧草稿』（文庫〇八・b 〇一一七）※岡村千曳（二八八二〜一九六四）旧蔵

② 早稲田大学図書館蔵『魯西亜志』（文庫〇八・b 〇〇九〇）※同右

③ 早稲田大学図書館蔵『熱多羅拈談』（ル〇四・〇四三六二）※同右

④ 信州大学附属図書館蔵『蝦夷記聞』（二九〇・E 九八・K OTANI）

などに捺されることを知るも、なほ未勘。教示を冀ふ。

2 伝本としての位置づけ

式子内親王集の伝本系統は、以下のやうに概括出来る。

即ち、『新統古今集』以前は、A・B・C三種の百首歌のみからなる家集であつたものが、『新統古今集』成立以後、相異なる二者の手により、勅撰集に基づく補遺が施されたものが、現『式子内親王集』といふことになる。事実、従来まで知られてゐた『式子内親王集』には、一つの例外もなく、勅撰集による補遺(D・d)が添へられてゐる。

ところがこの筑波大本には、その補遺が存しないのである。むしろ、D歌群が闕落してゐるだけといふ見方も出来る。しかし、前項で示したやうに、本書の体裁を見るに、巻末に白紙1丁を有してゐる点から推して、少なくとも筑波大本を書写した某には、これを以て完本とする意識があつたと見る他なからうし、筑波大本の親本において既に、D歌群は存してゐなかつたと見るのが自然である。即ち、諸本を遡及し根源的に論ずるのならばはいざ知らず、筑波大本のみをとりあげて論ずる限り、これはこれで、零本ではなく完本と断ぜざるを得ないのである。

となると、この筑波大本こそ、D歌群が付加される前の、いはば原『式子内親王集』の末裔ではないかと、想像したくなるのが人情であらう。

そこでまづ、筑波大本の他本には見られない特徴を確認し、その上でこの推定の可否を考へてみたい。

①端作題

多くの諸本は、「前齋院御百首」「式子内親王集」「式子内親王御家集」といった端作題を持つか、または端作題を闕く。ところが、筑波大本は「式子内親王御哥」に作る。管見の限りでは、益田勝実蔵本題簽（ただし、原題簽か否か、判断が難しいのだが）に「式子内親王哥」とやや近い表現を見るのみであり、他に類例を見ない。

②闕脱歌

既に積文及び1書誌で示したやうに、筑波大本には、多くの闕脱

歌が存する。いま一度一括して示すと、

【九九〜一六九……闕】

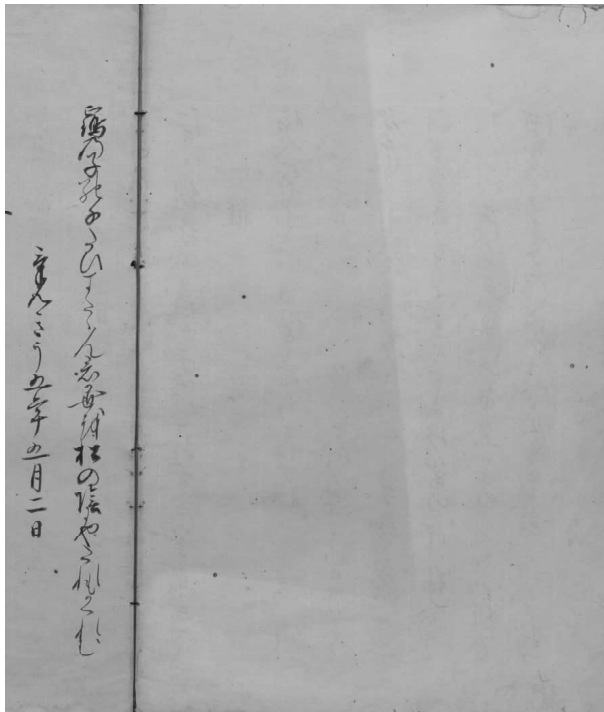
【一七八……闕】

【一面空白〓一九三〜二〇〇……闕】

【二九〇……闕】

これらの闕脱は他本において見られない。ただし、一七八・二九〇番歌の闕脱は、書写時における誤脱とも考へられるので、小論では深く立ち入ることを控へる。問題は、残る二例である。

順序は逆になるが、まづ一九三〜二〇〇番歌の闕脱を見てみたい。筑波大本の現状を図版で示しておく。



11丁裏

12丁表

このやうに、11丁裏がまるまる空白となつてゐる（念のために確認しておく、11丁表には七首の和歌と部立名「雜」の都合八行分本文が書写されてゐる）。歌数でいふと八首が闕けてゐることになるのだが、それは丁度半面分に相当する。これは書写時における誤脱とは考へにくく、より根源的な原因が存したと見るべきであらう。このあたりを書写した折の書写者の心理を憶測するに、

* 一面八首分の闕脱が、親本（乃至その祖本）において生じてゐたことを理解してゐた。

* 闕脱があることを、後代の筑波大本の享受者にそれと明確に知らしむるべく、あへて、一面分の空白を設けた。

といったものが想像される。ここまでではさほど話は難しくない。問題はその先、ではいかなる事情により、親本（乃至その祖本）にかかる闕脱が生じてゐたか、である。仮に、1丁分（即ち15〜16首）闕脱してゐたのならば、丁めくりの際のミス（2丁まとめてめくってしまったが故の）と見做しうる。しかしこの場合、その説明は使へない。

結論を急がず、いま一つの闕脱を見てみよう。

九九〜一六九番歌の闕脱である。①書誌でも示した通り、この闕脱は、9丁裏と10丁表の間で生じてゐる。筑波大本では、9丁と10丁は同じ第一括に存するので、仮に親本が筑波大本と同じ列帖装であつたならば、括り単位での脱落が生じてゐたため、筑波大本の書写者がそれに気付かず続けて書写してしまつたための闕脱と、一応は推定出来る。そこでいま仮に、親本が三括より成つてゐたと考

へてみよう（ただし、一首二行書であつた場合は、単純計算で、括りの数は倍になる）。その真ん中に位置する括り（Ⅱ第二括）全体が欠落し、その状態のまま書写したものが、筑波大本と考へるわけである。すると、親本の括りごとの歌数は、

第一括……………一〜九八（計九八首）

第二括……………九九〜一六九（計七一首）

第三括……………一七〇〜三〇〇（計一三二首）

となつてゐた筈である。最終の括の紙数が他の括に比べて若干多くなるのは、列帖装ではまみ見られることであり、不審とすべきほどの紙数とはいへない。また第二括もやや歌数が少ないが、これも計算上ありえぬほどの不審を惹起するものではない。いふまでもないことながら、親本が袋綴であつた場合は、紙数の多寡は問題とならない（が、後述する理由から推すに、その可能性は低いと思ふ）。

以上二ヶ所の闕脱とその来歴を推測して来たが、何故かかる闕脱が生じたのか、といふことについて、一つ仮説を提示しておきたい。即ち、かかる闕脱を、親本（乃至その祖本）において古筆切として切り出された痕跡と見てはどうか。一面空白となつてゐる11丁裏は、片面だけがはぎ取られた故、と考へる。従つて、親本（ないしその祖本）は、鳥の子紙に書写された列帖装（さらに限定すれば、一面八行書である）であつた蓋然性が極めて高いこととなる（即ち、袋綴装であつたとは考へない）。この仮説は、次項及び校勘作業で再度検証してみたい。

③集付

『式子内親王集』諸伝本には、(その様態にこそばらつきはあるもの) 集付が例外なく存する。集付が存しないのは、いままで調査し得た伝本の中にあつては、この筑波大本のみである。

ところで、『式子内親王集』には、以下の古筆切が存する。

〔甲〕伝光厳院筆四半切

1 藤井隆蔵 (二二五〜二二八下句、集付アリ)

※藤井隆・田中登著『続国文学古筆切入門』(和泉書院、一九

八九・四) 所掲、拙稿『式子内親王集』伝本研究補綴』『研

究と資料』三五、一九九六・七) 参看

2 出光美術館蔵 (二二八下句〜二二二、集付アリ)

※『出光美術館蔵品図録 書』(平凡社、一九九二・七) 所掲、

拙稿『式子内親王集』伝本研究補綴・其二』『研究と資料』

三六、一九九六・一二) 参看

〔乙〕伝崇光天皇御筆式子内親王集切

1 個人蔵「諸家集手鑑」所収 (二八一下句〜二八四、集付アリ)

※『秋の特別展 諸家集の古筆』(春日井市道風記念館、二〇〇

〇・九) 所収

〔丙〕伝称筆者未詳「南北朝頃写」切

1 田中登蔵 (二四二〜二四七上句、集付ナシ)

※拙稿『式子内親王集』伝本研究補綴・其二』『研究と資料』

三六、一九九六・一二) 参看

小論で細かく論ずるには至らないが、〔甲〕と〔乙〕は、筆跡・体裁等から鑑みるに、ツレと認定して良いと思ふ。従つて、小論では同一の

ものとして扱ふ。

〔甲〕・〔乙〕の特徴は、

* C 歌群、即ち、正治二年院初度百首の部分である。

* 集付を持つ。

この二点に集約出来よう。特に後者の点から見て、もし仮に、筑波大本が原『式子内親王集』の末裔であつたとしても、これら〔甲〕・〔乙〕の古筆切と、筑波大本との距離は遠いと断ぜざるを得ない。

一方〔丙〕は、見かけ上集付はないのだが、もともとこの部分の歌群に勅撰集に入集した歌はなく、集付がないのは当然なのであつて、集付の有無は、筑波大本との距離を考へる際何ら判断材料にはならない。しかし、この切の内容が一四二番歌から一四七番歌下句であるといふ点は、あるいは、筑波大本との関係を憶測するに足るものかもしれない。といふのも、筑波大本は先にも示したやうに、九九〜一六九番歌を闕いてゐるからである。

○

以上、①②③の諸点から見て、筑波大本は、かつて伝存してゐたであらうABC歌群のみからなる『式子内親王集』の末裔であり、その親本(ないし祖本)は、(現存する『式子内親王集』の古筆切とは別個の親本から)古筆切として、一括り分が切り出され、かつ、一面分が剥ぎ取られた、その後の残闕本であつた、といふ可能性がある。と、ここでは措定しておく(なほ、かかる推定をする限り、親本(ないしその祖本)が袋綴装であつたとは考へないことになる)。この見通しにそつて、本文を現存諸本と校勘しつつさらに論じてみたい。

③校勘節記

前項で「筑波大本は、かつて伝存してゐたであらうABC歌群のみからなる『式子内親王集』の末裔」と措定してみた。もしこの見立てが正しいのならば、本文においてもよりプリミティブな形を残してゐるところが（全巻にわたって多数、か、どうかは別としても、少なくともいくつかは）あるはずである。管見ではそれではないかと思はれる一例を見てみたい。

色うつむ梅の木のまの夕月夜春のひかりをミせ初る哉（三）

A百首・春、三首目の歌である。初句「色うつむ」だが、管見に入つた『式子内親王集』の伝本はすべて「いろつほむ」に作る。したがつて、その限りでは、本文としては（筑波大本が出現するまでは）安定してゐた。しかし、「いろつほ（ぼ）む」といふ表現は用例を検し難く、また「つぼむ」といふ語の語義から考へても解釈が難しく、ゆゑに、研究者を悩ませてきた難解な措辞であつた。

○小田剛『式子内親王集全歌注釈』（和泉書院、一九九五・一二）

「つぼむ」「色つぼむ」は、八代集に用例なし。「いろつほむ」も新編国歌大観索引①～⑤巻で、式子の用例のみ。「色に出てつぼむ。梅の蕾にほんのりと淡紅色がさしてくること。」（大系）、「蕾にほのかな色のさしてくる意」（全書）、「紅梅か。紅の色彩がそのまま蕾の形になる」（全歌集）。

○石川泰水『和歌文学大系23 式子内親王集』（明治書院、二〇〇一・六）

類例の見えない語であるが、蕾が色付く意であろう。

○奥野陽子『私家集全積叢書28 式子内親王集全積』（風間書房、二〇〇一・一〇）

式子独自の表現。色自体が蕾んでいる状態、蕾み初めたまだ何色とも判別しがたい、春の趣もまだ秘めている固い蕾み、春の色の子感を蔵している状態を表現する。「色に出づ」の対義。諸注は、紅梅と解するが、むしろ紅梅より時期の早い白梅かもしれぬ。ともかく堅い、色のない蕾みである。早春を思わせる。

○平井啓子『式子内親王（コレクション）日本歌人選〇一〇』（笠間書院、二〇一・四）

【現代語訳】蕾がかたく、まだ色のきざしもわかりにくい梅の木の間……

【語釈】○色つぼむ―つぼみはじめのまだ何色とも判明しないような固い蕾。

初句の「色つぼむ」は解釈の分かれることばで、【語釈】の意のほか、紅の色彩がそのまま蕾の形となるとする考えもある。紅梅・白梅の種類も問題となつてこようが、ここでは苞をかぶり色がまだでないごく初期の蕾と解しておく。

このやうに、研究者均しく安定した解釈には至つてゐないと見ることが出来よう。また、「いろつほむ」といふ表現、小田論発表以

後に完結を見た『新編国歌大観』全巻、及び再編集の上刊行された

『CD-ROM版新編私家集大成』、及び近時公開されたWEB版

「新編私家集大成」（再再度補訂が施されてゐるものもあり、注意を要する）、さらに公宴統歌研究会編『公宴統歌 索引編』（和泉書院、二〇〇・二二）、日下幸男編『類題和歌集 付録 本文読み全句索引エクセルCD』（和泉書院、二〇一〇・二二）などを検する限りでも、小田

の調べの通り、他に用例を見ない。ここまで用例がないといふ岳ではなくこと、そもそも解しにくいといふことであるのだから、この措辞に式子の歌人としての個性を見ようとする前に、たとひ諸本間でテキストが全く揺れてゐなかつたとしても、ひとまづはこのテキストの形をうたがつてかかるべきではなかつたかとも、いまさらながら考へるのである。

では、筑波大本の独自異文「色うづむ」ではどうか。これならば、数は少ないものの、用例は同時代に複数見ることが出来る。

A 露氷る木の葉の下に跡閉ぢて月や山路の色埋づむらむ

（慈円『拾玉集』巻五・五三二四、建久元年・定家詠）

※和歌文学大系本による

（詠花鳥和詞各十二首／参議藤原）

十二月 早梅

B 色うづむかきねの雪の花なから年のこなたに匂ふ梅かえ

（定家・一九九五）※新編私家集大成による

さらに「いろうづむ」といふ歌形にこだはず広く検すれば、

ゆきこうはいをうつむ

C いろよりはかはこき物をむめの花かくれむものかうつむしらゆ

き（西行Ⅲ「聞書集」・二二三）※新編私家集大成による

D ぶりつもる色よりほかの匂もて雪をは梅のうつむ成ける

（定家・三〇四）※新編私家集大成による

といった用例をさらに得ることとなる。

特に注目したいのは、C・D。いずれも式子歌と同時代ないしそれ以前に詠まれたもので（Dは、文治三年・冬「閑居百首」の詠）、式子が属目しえた詠歌であり、式子歌の措辞の淵源と見做しうるものである。

また、Bは同じ「いろうづむ」といふ措辞があり、かつ梅歌であつて参考になる。定家が「参議」であつたのは、建保二年（二二一四）から承久四年（二二二二）であるから、式子没後の詠であることは動かない。従つて、ありうべき影響の方向としては、式子歌↓定家歌であり、式子歌の表現の源を考へるといふ点では活かすことが出来ないが、定家が式子歌をどのやうに読んだかといふ視点から見れば、式子歌の解釈に援用することは許される（定家は、『新古今集』編纂にあたり、A百首を撰集資料として閲読する機会を持つたはずである）。

以上の用例を通覧するに、B・C・D歌の見られるが如く、「（梅の）色」を「埋づ」めてゐるのは「雪」である。とすると、式子歌の場合、早春の歌であり、かつ、次の四番歌においてもなほ「春くれハ心もとけてあハ雪のあハれふりゆく身をしらぬ哉」と、春雪の景が歌はれてゐるので、三番歌においても、「雪」の語は見えない

ものの、「雪」を前提として解しても良いであらう。このことは、五首後の歌、

消やらぬ雪にはつるゝ梅かえの初花そめのおくそゆかしき（八）
この歌においてもなほ、「梅」と「雪」がとりあははされてゐることからも、それと証されよう。すなはち、「梅（の色）」を「埋づ」めてゐるのは、「雪」と解する道が開けたといふことだ。しかし、恐らく話はさう簡単ではあるまい。そのあたかも「雪」と見えるもの、それは「雪」に反射する「夕月夜」の淡い「光」なのかもしれないのだから。

念のためにことわつておくと、小論の筆者は「色うづむ」の形の方が正しいといつてゐるのではない。こちらのテクストの方が、解積がまづは通るし、かつ、歌意全体から見てもなだからに解しうる、といふことだけをいひたいのである。また小論では、この二つの異文が発現したその所以に関して論及しえない（つほ→うつ、といふ異文の発生その所以を、字形類似故の誤写と軽々には断じ得ず、も少し根深い問題がここにあるだらうと踏むからである）こともいひそへておく。

とはいふものの、しかく論じてくれば、「いろうづむ」「いろつばむ」、いづれの形がより古いものでありうるか、そのしかるべしさを比べよと問はるれば、大方の判断が「いろうづむ」に傾くであらうことは予想される。したがつて、僅か一異文の検討を通してのことに過ぎないが、さきに立てた見立て―筑波大本は、かつて伝存してゐたであらうABC歌群のみからなる『式子内親王集』の末裔であらう―本文においてもよりプリミティブな形を残してゐるところ

があるはずだ―は、それなりのしかるべしさを有する仮説として提示されても良いと判断するのである。

【補記】

小論は、平成23年度・日本学術振興会・学術研究助成基金助成金・挑戦的萌芽研究「校勘の方法に関する基礎的研究」（歌題番号〓二三五二〇五〇、研究代表者〓武井）による研究成果の一部を含む。

積文、図版掲載の許可を頂きました筑波大学図書館にあつくお礼申し上げます。

一
号

式子内親王御歌

長生の心深くもるに音ねに徳の言らば此の
 うらひあはれし心を徳と忘るくまらふ人の言を
 色づいし梅のあはれまら夕月あまのひあはれをわら
 ともれし心もさうあはれ言のつられあはれも
 又つしきさこのもつあはれもさうあはれ言のつら
 治へくつこえもかざらわく世に治る言のあはれ
 こそうつこえもかざらわく世に治る言のあはれ